

## ハミルトンの四季

吉岡雅光

### はじめに

の場を借りて心よりお礼を申し上げたいと存じます。

私は家族(妻、息子、娘)と共にニュージーランドに渡り、現地の慣習や制度を学びながら地方都市の生活を体験しました。制度的な側面については稿を改めて論じさせていただくこととし、本稿ではこの国での生活体験と雰囲気伝える意味で、私が現地から日本の何人かの同僚に発信したEメールを整理して公表したいと思います。

私は平成十年四月から平成十一年三月までの約一年間、ニュージーランドのハミルトン(Hamilton)市に滞在し、ここにキャンパスをもつワイカト大学(The University of Waikato)の社会学科に所属し、ニュージーランドについて見聞を広めさせていただきました。とくに公私共いろいろと便宜をはかってくださったスウェイン(David Swain)先生や同大学東アジア研究所のヘンシャル(Ken Henshall)先生には大変お世話になりました。こ

### 一 初 秋

四月十三日にニュージーランドに来てからいろいろと

慣れないことばかりで慌ただしく過ごしてきました。初めての海外生活なので見るもの聴くもの、すべてが珍しいものばかりです。

細々としたことはまた追々お話しすることにしまして、私たち家族はハミルトンというこの国第四の都市（といっても熊谷市ほどの人口ですが）の郊外で生活しています。借家は三百坪くらいの敷地にやや旧式な平屋家屋が建ち、白樺も何本か生えており、非常に快適な生活をしております。気候は一日の変動が大きいですですが比較的カラッとしていて過ごしやすいです。もっとも今は初秋なのでそのなのかもしれません。道行く人々は半ズボン・半袖姿の人もいればセーターを着ている人（私のような…）もいます。白人だけでなくマオリ人、アジア系、ラテン系の人々などいろいろな人種が生活していますので、われわれもあまり目立ちません。ハミルトン市は浦和市と姉妹都市になっており、走っている車はほとんど日本車（多くは中古車）なので多くの人々が日本のことをよく知っていますが、在住している日本人はあまり多くはな

いようです。ただ、ワイカト大学に付属する語学専門学校には日本人の学生が多数来ていると聞いております。

ワイカト大学は私の住んでいるところから三キロメートルくらい離れており、車でないと少々遠すぎますが、六七ヘクタールあるという広大な敷地に四、五階建てくらいのあまり高くない建物がいくつも建っており、いかにもユニヴァーシティ（こちらの人はワイカト大学のことを単に「ユニヴァーシティ」と呼びます）といった感じです。キャンパスの中にはたくさん鴨が飛来している大きな池が二つあります。駐車場も広大ですが、多くの学生が車で通学するために朝はすぐに一杯になってしまします。学生数は約一二、〇〇〇人、スタッフは全部で一、三〇〇人ほどいます。社会学科のスタッフは五人くらいしかいないので学科としては小さいのですが、もちろん大学院も（ドクター・コースまで）もっています。社会学科の専任教員数は少ないのですがこの大学は非常に多くの学科をもっています。社会学科以外の学科に社会学者が多数所属しています。こうした教員を加えま

すと、大学としては十名を越える社会学専門の教員がいると思われれます。私は招待して下さったスウェイン先生に付き添われて、すでに十名を越えるスタッフにお会いしました。こちらの大学組織に関してはまだよく分かりませんが、こちらの教員は圧倒的に講師が多く、教授や助教授は非常に数が少ないようです。

今週の月曜日からは子どもたちも現地の小学校に通いはじめ、ようやく生活が軌道にのってきた感じですが。わずか二週間くらい暮らしただけでも日本とは非常に違ったことばかり目につき、話したいこともいろいろありますが、長くなりますので細かい話はまた後日ということにします。早くEメールを出したかったのですが、実は、こちらの大学がイースター休日であったことから、大学のコンピュータ技師に会えず、Eメールの設定が遅れてしまいました。昨日ようやくインターネットに接続できたと思ったらメールの送受信ができなかったので、今朝再びノート・パソコンと大きな変圧器（こちらで購入しました）を持って大学に行き、コンピュータ技師にみて

もらって、ようやくEメールがダイアル・アップで接続できるようになりました。

こちらの大学はコンピュータが大変普及しており、学生は大学と家庭とをダイアル・アップで接続することができます。回線が不足してつながりが悪いといったこともなく快適につながります。地域内の電話料金が無料であることを考えると多くの学生が相当長時間接続していることが予想されますから、よほど太い回線が導入されているのでしょうね。それはともかく、コンピュータ技師は（日本も同様ですが）大変忙しいのですが、そんな中を、私のように片言英語しか分からない者の説明を辛抱強く聴いてくれて、日本語版のダイアル・アップ設定を何時間もかけて仕上げてくださいました。感謝感謝。

## 二 晩 秋

ニュージーランドへ来てからもう一ヶ月以上たち、こちらの生活にも大分慣れてきました。ハミルトンはすっ

かり秋も深まり、紅葉すべき木々の葉はすべて色づき、

を一枚添付します。

すでに落ち葉が舞う季節となっています。ただ、日本のように多くの木々が紅葉するのとは違い、ニュージーランド自生の種は紅葉しなで、緑のままの木々も多いです。芝生はまだ青々としています。

### 三初 冬

こちらに来て人々のスタイルを見てまず驚いたことは、公道を裸足で歩いている人が珍しくないことでした。子どもたちが裸足というのはまだ理解できるとしても、そればかりか大人の男性も女性も、(人種にも関係なく)裸足で歩いている人を見かけるのです。ここでは自宅の庭はもちろん公道でも街でのショッピングにも裸足で歩いている人をよく見かけるのです。もっともここに来て少々冷え込みが厳しくなり、さすがに裸足姿はほとんど見かけなくなりましたが。

今日子どもたちと一緒にワイカト大学の外側を一周してみました。ゆっくり歩いて約一時間ほどかかりました。さらに外側にも大学の敷地があるらしいので、実際はもっとかかるかもしれません。デジカメで撮った大学の写真

早いもので、ニュージーランドに来てからもう二ヶ月が過ぎてしまいました。こちらはすっかり冬に入り、先日は霜が降りて非常に寒いおもいをしました。しかし、このような日は希で、冬でも雪が降るようなこともなく、これからもこれ以上寒くはならないという話をこちらに住んでいる人から聞いてホッとしています。確かに日本の東京よりは暖かく、ましてや「赤城おろし」の吹きすさぶようなことはありません。芝生はまだ青々としていますので、この分ですと一年中枯れないかもしれません。前にも少し書きましたが、今日は車に関する話題を書きたいと思います。ここでは日本車以外の車を探すのが困難なほど日本車が一般的です。ただし、そのほとんどが中古車であって、ニュージーランドは日本の一大中古車市場となっています。私はこちらに来て一台の中古車

を購入しました。フォード・レーザーという一、三〇〇CCの車です。(アメリカの車ですが、確かマツダと提携して造っているものではないかと思えます。)この車を手に入れたのは好みの問題と言うよりも、たまたまこの三月までワイカト大学に来ておられた日本のある大学の先生が乗ってらしたものを譲っていただいたからです。この車は一九八五年式のマニュアル車で、オート・チョークではなく手動式で操作するもので、エアコンもついていません。六万五千キロほど走っていて、値段は五、三〇〇ドルでした。はじめは左側のサイドミラーも付いていなかったのですが、この車を仲介してくれたヘンシャル先生にたずねたら、ニュージーランドでは左側のミラーは無くても問題ない、との返事でした。それでも私は左側のミラーを見る習慣があるので、後日修理工場へ行って付けてもらいました。(ちなみに、ニュージーランドでも左側のミラーが付いている車の方が圧倒的に多いのですが。)彼の話では、この車は傷がなく走行距離が少なくエンジンの調子が良いので「掘り出し物」だそうです。

日本人の感覚では、この車にしてこの値段は決して安いとは言えませんが、ここでは日本で滅多にお目にかかれないような旧式のポンコツ・カーも現役で堂々と走っていますから、私の車はグッド・カーの部類なのかもしれません。この先生によると、この車の欠点は色にあるので、これが黒かもっと暗い色であれば高く売れるから、塗り替えたかどうかとすすめられました。十三年も前の車を塗り替えて高く売ろうというのですから、この国の人々の「物持ちの良さ」には驚いてしまいます。日本ではつぶすしかないようなポンコツ車が for sale \$1,000 とか \$200 とかの貼り紙を付けて個人の家の前に置いてあったり、貼り紙をつけたまま走っていたりするのも珍しくありません。

車を購入すると名義変更や登録をする必要がありますが、ニュージーランドでは面白いことに、車の所有者登録は郵便局を通じて行い、登録すると直ちに非常に詳細な所有登録証書 (Certificate of Registration) が送られてきます。ちなみに、私の購入した車の名義変更記録

(Ownership History)を見るとこれまでに六人のオーナーが代わっており、それらの名義変更年月日 (Transfer Date) と元所有者の名前がすべて記載されています。

これは今度私がこの車を売却する時まで保管する必要があります。こういった証明書関係はスピーディでありながら、日本以上に詳細かつ堅実に行われているのには感心します。車検 (WOF) はまだ経験していませんが、通常半年に一回必要とされていますので、そろそろ考えなければなりません。

幸いなことに、私の車はヘンシャル先生がおっしゃるようにエンジンの調子が良く、今のところ故障もなく動いています。こちらでは一般道の制限速度が一〇〇キロで、信号は数えるほどしかありません。速度制限されている道路も日本のように多くはありませんので、車は極めてスムーズに走ります。スピードの点からすると私の車では少々きついのですが、まあ何とか走っています。

こちらではガソリンスタンドに行くと (店員に頼めばやってくれますが) 多くの方が自分でガソリンを入れて

います。日本では自分でガソリンを入れることがなかったのが初めは戸惑いとともに少々怖い感じでしたが、最近ではこれにも慣れてきました。また、こちらでも日本と同じようにガソリンの値下げ競争が激しいようです。わが家の郵便受けにもガソリンの割引クーポン券 (ほんの少額の値引きなのですが...) などが入ったりしますので、面白半分これを使ってみたりしています。

こちらは左側通行で、交通ルールは日本のそれと非常によく似ています。二、三の基本的な相違点を覚えておきさえすれば、日本と変わりなく運転できます。その中で最も変わっているのがラウンドアバウト (roundabout) です。これは交差点で、車は交差点の中心部を周回するように走る仕組みです。ラウンドアバウトに来ると必ず「GIVE WAY」の標識が立っています。これは右方向から車が来たり、ラウンドアバウトに他の車が入っているときはその車に優先権があるのでその進行を妨害してはいけないという意味です。一時停止とは違って必ずしも停止する必要はありません。これははじめ怖い感じがし

ましたが、慣れてくると信号とは違って待ち時間が少なく、右側だけ気をつけていけばよいのでなかなか安全なシステムであると思うようになりました。ただし、これを日本に導入するという案は恐らく実現性が乏しいと思います。日本のように車が混雑していたら、いつまでたっても動けないということにもなりかねませんし、そもそもロータリーにするために交差点には相当広いスペースが必要になってしまい、土地のない日本では大変な費用がかかってしまいそうだからです。

車に関しては型や使い方や駐車場や関税など、まだまだ面白いことがあります、長くなりますのでこれくらいにしておきます。

#### 四 冬

日本では関東地方の梅雨明けはまだだそうですが、ニュージーランドでも最近とくに雨が多く、日本の梅雨のような気がします。気温が高くないので日本のような蒸し暑

さを感じることはありませんが、七月に入ってからジメジメと鬱陶しい日が続いております。最近、私の住んでいるハミルトンも大雨に見まわれ、すぐ近くにあるハントリー (Huntly) という町でワイカト川が氾濫し、オー克蘭ドへ通じる国道一号線が不通になるという災害が起りました。こちらの七、八月は最悪のシーズンで、これが過ぎないとなかなか天候が安定しないらしいです。

さて、今回は食べ物の話でもしましょう。こちらで私は何を食べているかというと、朝食は日本とあまり変わりがなく、トーストとミルク、それに卵やソーセージといった簡単にできるものが中心です。ただ、こちらのミルクはどうも日本のものとは味が違っていて、牛が日本のような配合飼料ではなく自然の草を食べているせいでしょうか、少し臭い感じがします。もっともメーカーによっても味が違いますし、ダイエットしたものやカルシウムを強化したものや成分調整したものなど、日本と同じくいろいろな種類の牛乳が販売されておりますので一概には言えませんし、ノースランドの方へ行った時は

日本の牛乳に近い味のするものを飲みましたので、地域によっても違うかもしれませんが。

昼は日本では学食の弁当やうどん・蕎麦といったものが多かったのですが、こちらではミンスパイやサンドイッチ、ハンバーガーが中心となっています。ミンスパイはご存じのようにイギリスの食べ物ですが、こちらでも調理されたいろいろな種類のものが売られております。こちらでは電子レンジで「チン」するだけで料理が終わってしまうので簡単でいいと家内が申しております。またサンドイッチの種類も豊富で、ワイカト大学の学食でも多様なサンドイッチが売られています。ハンバーガーはこちらでは子供ばかりか大人にも圧倒的に人気のある食べ物で、ちょっとした街にはマクドナルドが必ずあります。こちらでは他にキングバーガーというハンバーガー・チェーンがあり、両者が二大ハンバーガー・ショップとして競争しています。先日地域新聞に両者のブラインド・テストが載っていました。男性にはボリュームがあり肉の臭みのあるキングバーガーの方が優勢であったようで

すが、女性と子供には圧倒的にマクドナルドの人气が高かったようです。私はハミルトンのマクドナルドでKIWI BURGERなるものがあったのでどんなものかとこれを注文しました。しばらく待たされた後、この中にビートルート (beetroot) が入っているハンバーガーが来ました。私はビートルートを初めて食べてとても美味しく感じましたので、後で缶詰のものを購入しました。しかし、これは少量ならばハンバーガーや肉と合いますが、日本の赤カブを食べるつもりで（漬け物感覚で）食べるとあまり美味いものではないことに気がきました。結局ほとんど捨てるはめになりました。その後はキーウィ・バーガーを食べる機会はありませんが、マクドナルドにはしばしばお世話になっております。ロトルアのマクドナルドでは、英語で注文していたらレジの男性が日本語で話して来たのには驚きました（もっともロトルアは日本語でも通じる店が多いのですが）。他には昼食にマフィンを食べる人が多いです。日本人の感覚ではこれは「おやつ」としてしか考えられませんでしたので、私はこれ

だけで昼食をすます気にはなれませんが。

わが家の夕食は多くの場合ご飯です。米は近くのスーパーでオーストラリア米が容易に手に入りますし、これは日本米と同じようになかなか美味しいです。幸い、私もが住む前にこの家を借りておられた日本人の先生が電気釜を置いていって下さいましたので、これによって米を上手く炊きあげることができます。日本の親戚や知人やらがハミルトンに乾物を相当送ってくれましたので助かりますが、実はこちらでも味噌、醤油を始めとする調味料は大体手に入ります。ただし日本製は日本の三倍位の値段がしますし、製造年月日はあてになりません。また、韓国製や台湾製の調味料、生うどん、インスタント・ラーメン、豆腐なども手に入ります。中国人の開いているショップや中華料理の店も多いので、味のことをうるさく言わなければ一応日本で食べていたものを食べることは可能です。寿司も買うことができますのですが、生鮭は難しく、こちらの人はおにぎりと寿司の区別がでない人が多いことに現れているように、巻き寿司が中

心です。生鮭はサーモンくらいなものでしょう。もっとも私はハミルトンで生鮭を食べる気にはなりません。オークランドに行くとき日本料理店がありますのでそこで生鮭を食べることができます。マグロの代わりにタイの鮭が多いようです。ただし、こちらの人々の夕食に対する出費の感覚からすると最低でも三倍くらい覚悟しなければならぬでしょう。こちらの人々にとってはマクドナルドやケンタッキーやピザ・ハウスへ行くことがけっこうデイナーとしての重みをもっているのです。とくに金曜日の六時ごろはこれらの店は混み合います。面白いことに、夜この国ではこれらの店の中で食べる人は非常に少なく、ほとんどの人がテイクアウト（こちらではTake Away）なのです。もっとも、もっとお金を張って予約制のレストランにでも行けば話は別ですが。ともあれ、料理のことは私はカレーライスくらいしか作れませんので家内がいろいろと工夫して作ってくれます。ただわが家では（ニュージールランドの多くの家庭がどうも同じような状態らしいですが…）ガスコンロでは

なく電気コンロしかありません。オーブンも電気です。(ついでに風呂等の給湯器も電気です。) したがって、強い火力の必要な料理ができず、家内はこれで困っています。わが家では日本食をベースに三日に一回くらいステーキやピザ等のニュージールランド・フード? を食べています。牛肉のステーキはこちらではとても安く、鶏肉や豚肉よりも安いです。こちらでは鶏肉料理は高級料理という話もあります。ステーキの切り身が非常に厚く、好きな人には天国ですが、わたしは厚いステーキはダメなので、フライ用の薄いステーキを焼いて食べています。切り身の厚いのはステーキだけではなく、日本人の感覚からするとすべての肉が分厚いのです。肉屋に薄く切ってくれるように頼んでも日本のようなスライス(これはshavedという)ができないので、牛丼のようなものや肉じゃがのようなものを料理しようとしても上手くできません。また、魚を食べたいときはサーモンか白身の魚を揚げたものが多いです。フィッシュ&チップスの専門店にはニュージールランドではどこへ行っても見られ、昼で

も夜でも皆よく食べています。ジャガイモはなかなか美味しいですよ。それにクムラ(kumara)というイモはとても美味しいです。これはマオリ語でサツマイモのことです。日本のサツマイモと非常によく似ていますが、表面が粗野でごつごつしています。しかしレンジで焼いて食べると全く焼き芋そのものです。

ニュージールランドには固有の料理というものがあまりありません。クムラなどを使ったマオリのハンギ料理は有名ですが、これは本格的には地中で蒸し焼きにする料理ですので一般の家庭で作るのは容易ではありません。ニュージールランドはもともと移民の国ですので、固有の料理というよりも英国やヨーロッパの国々のものが持ち込まれ、それに加えて太平洋島嶼の民族が持ち込んだトロピカルな食材や料理、さらに遅れて中華料理を初めとするアジア諸国のいろいろな料理がゴチャゴチャとあり、これといった固有の料理がないようです。もっとも食生活の上ではナショナル・アイデンティティはあまり問題となっていないようです。アジアからの移民者の相当部分がレ

ストランやパン屋、惣菜屋あるいは食料品店といった食品関係の仕事に就いているようです。

果物は非常に豊富で、わが家の者は皆果物好きです。で大変喜んでいきます。オレンジもオーストラリアから入るので一個二〇セントから三〇セントと安価です。また柑橘類も豊富で、私たちの住んでいる所でも多くの家で庭先にミカン類がなっています。わが家にも夏みかんのようなものがたわわになり、またマンダリン、レモン、リンゴ等もなっています。リンゴなどはスーパーで山積みになされて売られており、キッズ・アップルと称する小さなサイズのリンゴは四ドルも買うと十五個くらい来ますが、形は悪くともこういったものを豊富に食べられるのは嬉しいです。

そういった中で初めてお目にかかった面白い果物を一、二紹介します。その一つはフィジョア (Feijoa) といいます。緑色した果物で、キーウィ・フルーツより小さめです。洋なしのように実は柔らかくスプーンでほじって食べられます。好みの問題ですが、洋なしのような感じ

で香りがよく美味しいです。近所にも庭にこの木を植えている人がいるのでなっているとところを見ることができません。スーパーで買うとリンゴやオレンジよりも高く、結構いい値段がします。もう一つはタマリロ (Tamarillo) です。紫っぽいエンジ色をした不思議な果物です。サイズはフィジョア位ですがアケビのようにタネがやたらと多く、甘さがないのであまり美味くはありません。食べるところがあまりありません。最近ではスーパーの棚にたくさん出ていて、一個の値段は六〇セント位です。Tamarillos-redとあるので、他の色もあるのかもしれませんが。これらの果物の原産地はどこか私には分かりませんが、トロピカルな果物も手頃な値段でいろいろと食べられるのがこの国の良いところです。

## 五 春

Kia ora. Kei te pewhea koe? キオラ。お元気ですか。

今年はエルニーニョの影響が激しく全世界に及んだよう  
うで、日本は夏中天氣が悪かったのに加えて台風四号の  
被害で踏んだり蹴ったりのようですね。

ニュージーランドも大雨で大変でしたが、ようやく鬱  
陶しい冬から抜け出て、待望の春を迎えようとしていま  
す。わが家の前の歩道に植えられている木蓮も見事に咲  
いて、今ではもう若葉が出始めています。わが家の庭に  
もあれこれと草花が植えられているのですが、ラベンダー  
らしき花（冬の間もずっと咲き続けていましたが……）  
は最近勢いを増してきていますし、名前の分からない赤  
や黄色や紫色のいろいろな花も咲き始めました。冬の間  
咲き誇っていた椿はもう終わりです。

さて、今回はテレビの話でもしよいかと思います。現  
在、こちらではTV ONE、2、3、4の四チャンネル  
が無料で放送されています。どういうわけだか、1チャ  
ンネルだけが番組表にONEと表示されています。ONE  
と2は国営放送局だそうですが、しきりとコマーシャル  
を流しています。ONEは幅の広い番組構成で、CMが

ある点を除けば日本のNHKのような感じです。2はエ  
ンターテイメント的で若者や子供向けの番組が多いよう  
に思います。TV3は一九八九年に設立され、現在はカ  
ナダの会社と共同経営になっているそうです。番組の内  
容は様々ですが、エンターテイメント中心の性格をもっ  
ていて、印象としては若々しい感じの番組を提供してい  
るようです。十八〜四十九歳の年齢層をターゲットに  
していると聞いています。TV4は昨年（一九九七年）  
に始まったばかりの民間放送局で、他の放送局と違って  
朝は十時頃から始まり、まだ弱小の感じがします。

また、スカイ（SKY）テレビという契約制の衛星放  
送が一九九〇年から放送開始され、映画、スポーツ、  
ORANGE（エンターテイメント）、JUICE（音楽）、ニュー  
ス、CARTOON NETWORK（子供向け）、DISCOVERY  
（ドキュメント）といったジャンルの放送を行っています。  
これらを受信するにはテレビ放送会社と契約しなければ  
なりません。料金は契約チャンネル数によって異なりま  
すが、三つのチャンネルで週十ドル前後だそうです。私

どもの家はスカイ・テレビと契約していませんのでこれらの番組はホテルやモーテルに泊まった時に見ただけですが、番組表を見る限りではお金を出すだけあって魅力的な番組が多数含まれているようです。

テレビ番組を見てまず日本との違いに気づくことは、どの番組にも視聴対象が明記されていることです。G (General) が一般向けであり、PGR (Parents Guidance Required) が親の指導が必要なもの、AO (Adult Only) が大人向けです。Aといっても日本のアダルト映画のよくなものが放送されているわけではなくて、格闘ものや多少セクシャルなものもすべてこれに含まれてしまうようです。Gなどはほとんど子供番組です。わが家の息子も格闘ものが好きで、その多くが対象AOなのですが、これらをすべて視聴禁止にしてしまうと全く面白くも何もなくなくなってしまいますので、ある程度見せてしまっています。金曜日に Xena Warrior Princess というアマゾネスのように強い女性の娯楽番組があるのですが、これなんかはニュージーランドの多くの子供たちが見てしまっ

ているようです。

ここのテレビ番組は自国で制作されているものよりも、外国からの輸入が多いと聞きます。大体がアメリカ、イギリス、オーストラリアからのものですが、子供たちの話では日本の幼児向け番組(ダイレンジャー等)も放映されているらしく、現地の子供用シャツの絵柄に使われたりもしているらしいです。

番組の特徴として面白いのは、TV ONEでは英国BBC放送が毎晩一時〜六時頃まで行われていること(日曜日はとくに長くて朝の九時頃まで)、短時間ですがマオリ語のニュース番組があること(TE KARERE (the messenger と言う意味))、および週一度アジアのニュースをやっていること、また日曜日の朝には教会の日曜学校の説教を流していることなどです。

最後に、不平として、こちらのテレビ番組はスポンサーが多く(日本の TOYOTA, NISSAN, MITSUBISHI 等自動車会社をはじめ、PANASONIC, SONY, NINTENDO 等のコマーシャルは頻繁に流れています)、番組の途中、

大抵十分毎にコマーションが四分位入ります。コマーションの間に台所へ行ってお湯を沸かし、お茶を入れても間に合います。この点では便利ですが、こう頻繁にやられるとさすがに閉口してしまいます。私はこちらに来て安物の（日本製ですが…）ビデオデッキを買いましたので、テレビ映画はこれに録画しておいて、後日コマーションを飛ばして見るのがベターだと思っています。ニュージーランドの人々もテレビのコマーションづけには閉口しているらしく、ニュース以外は見ないとか、ラジオのほうがいいとか、という話を聞きます。民営化の弊害は意外なところに現れて来るようです。ビデオテープの録画時間について、日本では一二〇分テープが一般的なのに対してニュージーランドではなぜ一八〇分テープが一般的なのか疑問に思っていたのですが、その謎が解けました。こちらではテレビの映画番組は二時間ものが三時間もかかってしまうからなんです！

Hei kona mai. べげ、また。

P.S.

前回、「こちらでは生鮭を食べる気にならない云々」と書きましたが、ハミルトンで一件、生鮭を食べさせてくれる店を見つけたことが出来ました。この店では鮭、天ぷら、カツ丼といったものを食べさせてくれます。鮭はマグロではなく、サーモンと鯛です。エビ（甘エビではない）が付くこともあります。鯛はスナッパー(Snapper)というニュージーランドで獲れるもので、とても美味しいです。また、サーモンも臭みがなくてとても美味しいです。天ぷらは上手な家庭料理程度のものですが、ポリウムがあるので結構満足しています。このオーナーは韓国人ですが、店員にニュージーランド人と結婚している日本人女性がいます。私たちが埼玉から来たことを話すと彼女は埼玉大学出身で時々浦和市の子供スポーツ団が来たときにハミルトンでお世話することがあるという話をしてくれました。

また、その後、私たちはハミルトンにもう一軒美味しい生鮭を食べさせてくれる店があることを知りました。こ

れは日本人夫婦が経営する店で、切り身は大きく、鮭に創意工夫があつて種類も多く、ニュージールランド一ではないかと思うほど美味しい鮭を食べさせてくれます。この店の存在は、たまたま私たちの隣の家にワーキング・ホリデーで滞在していた日本人女性がこの店でアルバイトをしていたので知ることができました。

前にも書きましたが、ハミルトンはアジア系の移民者が多く、最近次々とアジア系の新しいレストランが開店しています。先日、中心街に開店したばかりの中華料理（広東風）店に行つて来ましたが、お客は中国人の他、白系の人も結構入っていました。ニュージールランドの人々は意外と日本料理も含めてアジア系の料理が好きな人が多いようです。ここにいと、外国に行かなくても移民者の本格的な各国料理が食べられるので嬉しいのです。

## 六 初 夏

十月三十一日はハロウィン (Halloween) でした。ハ

ロウインは日本ではほとんど見られない行事ですが、私はニュージールランドに来て初めてこの行事を経験しましたので、今回はそのことについてお話ししましょう。

まずは簡単に予備知識を。ハロウインの起源は、古代ケルト人のドルイド教に求められると言われています。ドルイド教は、紀元前二〜後二世紀にかけてヨーロッパのケルト人の間で広まった宗教で、イギリスのブリテン島では、ローマに征服されなかった所では五世紀ごろまで残っていたらしいです。この宗教は靈魂の不滅と輪廻・転生をと覚えており、どこか仏教の教えとも通じるものがあるかもしれませんね。ドルイド教の人々は、夜になると死神が邪悪な靈を呼び起こすと信じており、こうした悪靈を追い払うためにハロウィン（大晦日）には大きな焚き火をしました。ハロウインの時には、幽霊や魔女が姿を現すだけでなく、死者の靈が家族のもとを訪れるとも考えられていました。日本のお盆の迎え火みたいなものでしょうか。ブリテン島がローマに征服され、スコットランドやウェールズにキリスト教が入ってきてからは、

ハロウィンは十一月一日のローマの収穫祭と結びついて行われるようになり、この関係でカボチャ提灯なども使われるようになったらしいです。七世紀頃からは、ハロウィンの祭日は万聖節、すなわちキリスト教の全ての聖人たちをお祭りする日の前日に移されたというわけです。

さて、ニュージーランドは圧倒的にキリスト教徒が多い国ですが、ハロウィンの祭りはアメリカのように派手に行われることはない、私は聞いていました。ただ、新聞やちらし広告にはハロウィンを眼目にしてセールをしている商店は少なくありませんでしたし、商店街を歩くとハロウィンのための仮装用衣装や小道具をどこでも売っていました。また、隣町のケンブリッジ(Cambridge)ではレーザー光線を使ってハロウィン・ショーをやるということもラジオで盛んに宣伝していました。しかし、広告ほどの国でも、些細な行事でもあればこれを餌にして大々的に出されるものです。また、ハロウィン関係の品々は、まだ二ヶ月近くも先だというのに大量に陳列されているクリスマス商品の中の一部を占めているに過ぎ

ないという感じでした。ハミルトン名物？の土曜朝市にも、仮装して売っている露天商は一人しか見かけませんでした。(もっとも「朝」は幽霊や魔女は出設しないのかもしれないが…)ハロウィンの祭りに引っかけたアトラクションやショーを企画しているものもないことはないのですが、私はあまり聞きませんでした。そんなわけで、やはりニュージーランドではハロウィンはあまりお祭り騒ぎをしないのだろうと思っていました。

ところが、夕方になると何となく外が騒がしくなってきましたではないですか。私の住んでいるところは私どもの家の前に中学校があるものの休日は子供たちの姿はあまり見かけない大変静かな通りなのですが、どこから湧いて出たのか仮装をした子供たちがうろうろ徘徊しているではないですか！大体中学生程度の子供が多いようです。こちらでは今は八時でもまだ明るいのですが、早い子たちは六時頃から思い思いの幽霊や魔女や悪魔の格好をしてあちこちの家を回り始めたのです。日本人の家には入りにくいのではないかと思いましたが、そうと知ってか

知らないでか、やがて魔女の格好をした二人の女の子がわが家のドアをノックして“Trick or treat!”と言いました。私も初めての経験なので急いでデジカメラを取り出して彼女たちを撮らせてもらいました。面白半分に獲物は沢山取れたか聞いてみましたら、まだ回り始めたばかりなのでしよう、首を横に振って大きな袋を開けて見せてくれました。

次には幽霊やモンスターの仮面を被ったり化粧をした三人の男の子たちがやって来ました。カメラを向けると、彼らは「ちょっと待ってください」と言ってポーズをとってから撮影に応じてくれました。子供たちにとってはこちらがキリスト教徒であろうがなかるうが、そんなことにはお構いなしで、せっせとお菓子集めに精を出していました。その後も次々と現れ、結局二十人ほどの子供たちが回ってきました。家内は初めのうちは気前よくお菓子をたくさん与えていたようでしたが、そのうちだんだんお菓子のストックが乏しくなり、最後のほうはこれ以上回ってこられるとあげる物がなくなってしまうと言って

いました。実際、これ以上入って来られないように八時には本当に門とカーテンを閉めてしまいました。

ところで、与えるばかりでは損、というわけでもありませんが、こちらの小学校に通っているわが家の子供たちも、即席に新聞紙等を切り抜いたものを顔に貼り付けた仮装をして、近所を回ることになりました。手始めによく知っているお隣のお宅へ行き、まんまとお菓子を手に入れて帰ってきました。とくに娘のほうはこれに気をよくして、すっかり乗り気になってしまい、近所をもっと回りたいと言いました。七時をとくに過ぎていたのですが、結局、どちらかというと渋々であった「お兄ちゃん」を連れて、スーパーのビニール袋をもって出かけて行きました。しばらくして、近所のお宅を五、六軒回ったらしく、喜々として帰ってきました。戦利品を見ると、中にはクッキーを一箱まるまるくれた気前のよい人もいますが、こちらの人は心得たもので、小さなお菓子を一つくらいの人が多ようです。なにしろ何十人もの子供たちが回ってくるのですから奮発していたらきりが

ない、というものでしょう。われわれ親どもは、こちらは何も知らないものだから少々多くやりすぎたかな、などと「みみっちい」ことを話しておりました。

この日、わがバークレー・アベニューでは夜の八時を過ぎてはまだ、薄暗い中で子供たちの話し声が聞こえていました。きっとお菓子をたくさんくれる家の情報を交換したり、獲得した獲物の品評会でも開いているのでしよう。

## 七 盛 夏

ニュージーランドではこのごろめっきり夏らしくなり、蝉の声も賑やかにクリスマス・ソングと合唱しています。テレビ番組やショッピングの折り込み広告、商店街の飾り付け等々、クリスマス一色に染まっています。ハミルトンは地方都市ですので、オークランドやウェリントンやクライストチャーチのような派手な飾り付けや企画はありませんが、それでも中心部のガーデンプレスとヴィ

クトリア・ストリートに先日クリスマス用のオーナメントと街灯や電球のイルミネーションが飾り付けられました。クリスマスの特別セールで真夜中まで開店している店もあります。いくつかのショッピングセンターの入り口にはサンタクロースが腰掛けていて、子供たちと一緒に写真撮影に応じてくれます。生徒・学生たちはクリスマス休暇に入っただけでなく年度も終了しましたので、ここで完全に一年の区切りが着いた格好になっています。学校の先生やポストショップの職員、中年のオバサンまでがクリスマス用の可愛いイヤリングなどを着けており、大人たちも長いクリスマス休暇に入る人も少なくないので、なんとなく浮かれた感じが漂っています。今は人と会った別れの言葉はすべて“Merry Christmas to you & A Happy New Year!”です。

ここハミルトンで最も華やかなクリスマスの飾り付けをしている所といえばニュージーランド・テンプル(Newzealand Temple)をおいては他にないでしょう。これはモルモン教の寺院で、信者以外の人は神殿に入室

できないのですが、外から見学したり庭を散策したりすることは自由にできます。神殿の対面、神殿を下から望む位置に布教のためのサービスセンターがあり、そこでモルモン教の由来のビデオをみたり、モルモン教にまつわる展示品をみたりすることができます。先日、夜の九時ごろ寺院へ行って来ましたが、ハミルトンにこんなにも人がいるのかと思うほど多くの人が集まって来ていました。臨時駐車場も設けられていたのですが、すでにかなり一杯で路上にもずらっと車が並んでいました。九時といってもこちらはまだ薄ら明るく、テンプルの周囲は僅かな電球のオーナメントが飾られているだけでしたので、何を見にこんなにも多くの人々が集まってきているのかむしろ不思議に思っていました。ところが九時半ごろになり、あたりがいよいよ真っ暗になってきますと、テンプルの周囲の木々や芝生に張り巡らされた無数の電球が突然パッと点灯し、それは見事な飾り付けに変身しました。小高い丘の上ではキリストの生誕劇が演じられていました。その頃には人々の数も益々増え、数千人(？)

の人の山となっていました。

ところで最近、ハミルトンから五〇キロメートルほど西に行ったラグラン (Raglan) という所にサンタクロースがサーフボードに乗って現れました。“City Weekend” という無料のコミュニティ・ペーパーがこのサンタクロースにインタビューした記事を載せていますので紹介します。

\*\*\*\*\*

南半球ではクリスマスは真夏にやって来ます。そこで、シティ・ウィークエンド紙はカッコいいサンタクロースがラグランでサーフィンをしているところを写真に収めることにしました。

彼らはサンタクロースにクリスマス・プレゼントを北半球で冬に配るのと南半球で夏に配るのではどんな違いがあるか、とたずねてみました。サンタクロースはこう答えてくれました。「それは南半球では配達が楽しいことさ。纈は凍り付かないし、プレゼントも凍ることがないからね。」

しかしながら、トナカイは冷たい水をたくさん飲みたがるし、サンタはときどき着ているものと顎のひげが暑すぎると感じています。「でもね、この素晴らしく晴れ上がった空がそれを十分に補ってくれるのさ。」

シティ・ウィークエンド紙は、南半球のクリスマス暑さを防ぐために、次のような提案をしたいといっています。

①伝統的な七面鳥や熱いクリスマス・プディングを忘れること。これをバーベキューのクリスマス・ディナーに変更して、冷たい新鮮なサラダ、アイスクリーム、新鮮なフルーツ・サラダをデザートに食べることに。

②子供たちのクリスマス・プレゼントの中に空気で膨らますおもちゃや空気マットレスがあれば、早速海岸にもって行って使うこと。

③公園へ行き、木陰でクリスマスのピクニック・ランチを食べること。それはレストランに行くよりも安上がりだし、ディナーの仕度をするのにハッスルしなくてもいいから。

④一年で最も特別な日を、北半球にいてヒーターを焚き部屋の中にじっと閉じこもってすごすことが、どんなにぞっとすることか想像してみるといい。

⑤費用のかからない最良の贈り物だってある。直ぐにもそれを必要としている血液センターに行って、血液を寄付することだ。

⑥そして、善意を施し、善良な祈りを捧げることだ。

\*\*\*\*\*

ヨーロッパの伝統を持ち込んでいるとはいえ、移民者の集団らしく質素・儉約のニュージーランド人らしい合理性が出ているではありませんか。ニュージーランドではクリスマスが夏休みと重なるので、学生はもとより国民みんなが一年でもっとも楽しみにしている季節が到来しようとしています。真っ青な空に白い雲のたなびくこの季節こそ、もっともアオテアロア／ニュージーランドらしい季節と言っていていいでしょう。